

研究ノート

旅する女性ピアニスト ～小倉末子の朝鮮演奏旅行

津 上 智 実

本論は、日本の近代化において先駆的な役割を果たしたピアニスト小倉末子（1891～1944）の演奏活動の一端を、演奏旅行という側面から明らかにしようとするものである。

小倉末子¹（1891～1944）は、1906年の開設と同時に神戸女学院音楽科に入り、1910年3月に同音楽部を卒業した。東京音楽学校（現在の東京芸術大学）で半年（1911年4～10月）、ドイツのベルリン王立音楽院で2年余（1912年4月～14年7月）学んだ後、アメリカのニューヨークとシカゴで活躍して評判となり、1916年春、25歳の若さで東京音楽学校ピアノ講師に迎えられた。翌年には同校教授となり、それから四半世紀以上にわたって演奏と教育の第一線で活躍した。

職業的音楽家にとって演奏旅行は必須のものであるが、女性の場合にはさまざまな困難がつきまといっていた。それを小倉の場合にはドイツ人の義姉マリア（1866～1940、末子の兄小倉庄太郎と1889年に結婚）の付き添いという形で克服していたことがこれまでの調査で明らかになってきた。中でも1916年12月の朝鮮への演奏旅行は、豊富な新聞記事によって克明に跡づけることができるのみならず、小倉の生い立ちや義姉の役割についても新たな情報を提供してくれて興味深い。これらを通して、小倉の活動の実態を跡づけてみたい。

1) 女性音楽家の演奏旅行

フライア・ホフマン『楽器と身体：市民社会における女性の音楽活動』（阪井葉子、玉川裕子訳、春秋社、2004）によれば、ヨーロッパにおいて演奏旅行をすることが女性演奏家にとっても自明のことになったのは1820年前後である。1830年代には鉄道が発達して移動の危険が大幅に軽減されたとはいえ、女性特有の困難さが伴った。まず女性演奏家の大半がピアニストかハープ奏者で楽器の移動が大変だったこと、また何より女性が旅する時には必ず誰かと一緒に、それもできれば男性について行ってもらうべきだと世間の人々が考えていたことである。「女性演奏家が男性の付き添いなしに旅をすれば、社会的な信用を失うのは避けられず、そうなれば、彼女がコンサートを企画したり、芸術家として高い評価を受けることはほとんど不可能であった」（316頁）。

その好例がクララ・ヴィーク（1819～1896）に見られる。クララはすぐれたピアノ教師であった父フリードリッヒ・ヴィークの下で才能を伸ばし、12歳から演奏旅行をして回るようになったが、ロベルト・シューマンとの結婚に反対した父は1839年、パリへの演奏旅行に同行することを拒んだ。その結果、クララはニュルンベルクのオーケストラに協演を断られ、「コンサートに関わるありとあらゆる種類の手紙を自分で書き、自分で招待券を配ってまわり・・・自分で調律師やピアノ運搬業者を手配し、そのかわり練習を続けなくてはいけない」（1839年1月14日、ニュルンベルクからの手紙）羽目になった（323頁）。パリに着いてからも同伴者の問題がついて回ったことが、クララからロベルトに宛てた次の書簡から知られる。

「私が、父親といっしょでないまでも、母親か叔母をいっしょに連れてこなかったと知ると、みんな驚きあきれれるのです。誰もが私に忠告します・・・どんな集りにでも付き添ってくれたり、訪問者を迎えてくれたりするような年配のご婦人がそばにいないかぎり・・・私は、自分にふさわしいだけの尊

敬を決して得られないだろうって」(1839年2月28日、パリからの手紙)
(325頁)

こうした状況であったので、女性音楽家の場合には、音楽雑誌等のコンサート評のなかで「折にふれて、彼女が誰に同行してもらって旅をしているかが報告された」(319頁)が、これは男性の音楽家の場合には考えられないことであった。

2) 小倉末子の朝鮮旅行

小倉の朝鮮旅行については、これまで触れられたことがない。そもそも小倉の生涯の音楽活動がどの程度の広がりを持っていたのか明らかではなく、唯一の先行研究というべき山田賢二「大垣が生んだ世界的な天才女流ピアニスト、小倉末子」²⁾においても、掲載されている演奏会はわずか6件である。

私は神戸女学院同窓会誌『めぐみ』の次の記述から、小倉が1916年10月から1917年夏の間に朝鮮へ演奏旅行したことを知った。

「御帰朝後東京音楽学校にて御教鞭を執らせられ過日は校の暇を得て朝鮮に赴かれ御演奏数回非常の賞賛を得て御帰京後直ちに御前演奏の栄を得られたり」『めぐみ』第64号、大正6（1917）年9月発行、42頁

その後、『読売新聞』CD-ROM版を活用して小倉末子に関する記事を収集する中で³⁾、次の記事に出会い、小倉の朝鮮旅行は1916年12月であったことが分かった。

1918（大正7）年4月27日朝刊4面：よみうり婦人附録

「君が代を歌った小さい朝鮮人に同情して／今日帝劇で開催される／朝鮮教

化事業慈善音楽会に演奏の小倉末子女史の談」

私は幼いときから基督教の教育を受けていましたから、新同胞であります朝鮮人に伝道する事業の拡張費募集のためには心から賛成しています。殊に一昨年の十二月私は京城に姐さんと一所に参りまして慈善音楽会を開きました。そのときのこと、一夜、李王家から招かれまして王妃の御前で演奏する光栄に浴しました。そのときの光栄は今でも深く感銘しております。また京城の各学校を参観しましたとき、可愛い児童が日本語で「君が代」を歌うのを聴きまして涙ぐまれるような気が致しました。私は僅か一週間しか朝鮮には滞在していませんでしたが、新同胞に対して深い愛を感じました。そして一時失望の底に沈んで暗い気持ちでいました新同胞が、基督教によって漸次光明に導かれて行く姿も見ました。私は愛する新同胞の幸福を祈っておりますときに朝鮮教化の寄付金が募集されることを知りました。女の力ではありますががつくされるだけのことをしたいと思いました。[下線引用者]

この記事には「朝鮮国で犬コロと戯れて居る小倉末子女史と令姉」というキャプション付きの写真が添えられている。

そこで当時京城で発行されていた日刊紙『京城日報』を調べたところ、1916年11月30日から12月28日までに、表1の通り、小倉末子来訪関連の記事25点(写真6点を含む)を見出した。

表1)『京城日報』(1916年)の記事一覧

- 1) 11月30日(木) 第3311号(29日夕刊) 2面5～6段「洋琴の名手小倉女史／来たつて京城の音楽界賑ははん」【写真1：[横顔]】
- 2) 12月6日(水) 第3317号(5日夕刊) 3面2段「小倉末子女史／京城演奏の日程」
- 3) 12月9日(土) 第3320号、3面6段「うわさのうわさ」：[生い立ちとエピソードの紹介]
- 4) 12月12日(火)(夕刊) 第3323号、3面2～3段：「小倉女史演奏／▽朝鮮人婦人会および京城／基督青年会の主催にて」[演奏曲目一覧つき]

- 5) 12月13日(水) 第3324号、3面6段「うわさのうわさ」:[9日掲載分の訂正および兄弟等の紹介]
- 6) 12月15日(金) 第3326号(夕刊) 2面1～3段:「若い楽壇の女神／待たるる其日小倉女史の妙手／＝京城外人楽団のスミス氏は斯ぞ語りつ」
- 7) 12月15日(金) 第3326号(夕刊) 3面2～3段:「小倉女史演奏會日取／十八日を十九日に変更」
- 8) 12月16日(土) 第3327号(夕刊) 3面3段:「小倉女史著期」
- 9) 12月16日(土) 第3327号、3面3～5段【写真2:十六日朝入京すべき小倉末子女史】「小倉女史へ／花環を／婦人團の歓迎」
- 10) 12月17日(日) 第3328号(夕刊) 2面1～4段【写真3:ピアニスト来る、南大門駅にて】「軽く疲れた身體を／一等寝臺車の柔らかない絨(クッション)に凭せて／ピアノから離れると淋しくて淋しくて／と、小倉女史、黒目勝ちの／涼しい眼をパチパチさせて語る」
- 11) 12月18日(月) 第3329号、3面1～5段【写真4:ピアノを前に＝朝鮮ホテルにて小倉末子女史と令姉まり子夫人＝】「畏しこさ、御裳にのみ／眼止めて 夢見る心地に奏でし名曲／小倉女史、感激して、御前演奏の光榮を語る／あはれ、サレースの『キャプリース』」
- 12) 12月19日(火) 第3330号、3面2～6段:「天才を孕ぐんだ隠れたる温き力／まり子女史の苦心＝末子女史のお母さん代り／今日朝鮮ホテルで晴の演奏」
- 13) 12月19日(火) 第3330号、3面5～6段:「小倉女史の招待會」
- 14) 12月19日(火) 第3330号、3面6段:「小倉女史音楽會は今晚／八時より朝鮮ホテルで」
- 15) 12月20日(水) 第3331号(夕刊) 2面3段:「小倉末子女史、昌徳宮で演奏」
- 16) 12月20日(水) 第3331号(夕刊) 2面5～6段【写真5:營の花輪＝小倉末子女史へ本社より】
- 17) 12月20日(水) 第3331号、3面1～5段【写真6:彈奏、終りて＝朝鮮ホテルにて、午後十時＝】「あはれ、ショーパンの夢幻即興曲／弾くも、聴くも、夢心地に／昨夜、朝鮮ホテルの小倉女史音楽會」
- 18) 12月21日(木) 第3332号、3面6段:「小倉女史最後の彈奏」
- 19) 12月21日(木) 第3332号、3面6段「うわさのうわさ」:[二十日の馬車の寄附]
- 20) 12月22日(金) 第3333号、3面4段:「あの姿を／貴方は何う考へますか／いい調和ではありませんか」
- 21) 12月22日(金) 第3333号、3面5～6段:「二日目の彈奏／小倉女史の音楽會」
- 22) 12月23日(土) 第3334号、3面6段:「小倉嬢の出發」

- 23) 12月24日(日)第3335号(夕刊) 1面8段「人事消息」:[小倉末子嬢二十三日朝退京]
24) 12月24日(日)第3335号(夕刊) 2面3段:[昌徳宮／御前演奏／小倉女史を召す]
25) 12月28日(木)第3339号(夕刊) 2面7段「灯ともごろ」:[女学生間の流行]

これらの記事の内容から再構成すると、小倉の京城滞在は1916年12月16日から23日までの一週間で、その間にコンサート2回(19、21日)と御前演奏1回(22日)を行なっている。

小倉末子の朝鮮への演奏旅行(1916年12月) 日程表

14日(木) 午前東京発

16日(土) 午前8時50分、南大門駅着

17日(日) 午後3時半より東京音楽学校同窓会の茶話会

18日(月) 午後2時より西大門外丹羽清次郎氏方に於いて神戸女学院卒業生同窓会

19日(火) 正午より渡邊高等法院長主催午餐会、五時半より阿部本社社長晩餐会など
同、午後8時より第1回慈善演奏会(朝鮮ホテル食堂)

演奏曲: バッハ=リスト<プレリユード&フーゲ>、ショパン<バラード>、サン=サーンス<カプリース>、リスト<泉のほとり>、ドビュッシー<プレリユード>、
アンコール: ショパン<ファンタジー・アンプロンプチュ><エチュード>As Op. 25-1

20日(水) 馬車を一日寄附されて市内を回る

「20日～22日正午に至る迄淑明高等女学校學鑑淵澤女史、中央青年會のブロックマン、松本弁護士、尹致哭氏等の招待宴會ある筈」

21日(木) 午後7時より第2回慈善演奏会(鍾路中央基督教青年會館)

演奏曲: バッハ=リスト<プレリユード&フーゲ>、ショパン<ファンタジー・アンプロンプチュ><ベルソーズ>、サン=サーンス<カプリース>、シューマン<予言の鳥>、ドビュッシー<トッカータ>、アンコール3曲

22日(金) 午後2時より昌徳宮仁政殿で御前演奏(李王、妃兩殿下を始め各公殿下のため)

演奏曲は3曲と妃殿下のリクエスト曲2曲、

純金製宝石入婦人用懐中時計1個、同髪飾一具、金百円を下賜

23日(土) 午前8時半、南大門発列車にて東京に出発

当時は、新橋一下関間約25時間、関釜連絡船が所要11時間、釜山から京城へは京釜線で10時間あまりであったから、東京から京城まで丸2日ばかりだった。途中で半日か一日「神戸の令兄（小倉庄太郎氏）方へ立ち寄る」（記事8⁴）ことも検討していたようだが、結局立ち寄らずに直行したことになる。小倉が「折悪しく身害めて」（記事10）体調が勝れなかったので、早めに着いて休養を取ることを優先したのだろう。連絡船が荒れて「姉も私も少し疲れが出ました」（同）とも言っている。

帰りに神戸に立ち寄った可能性もあるが、12月28日午前には赤坂から投函したハガキ⁵が残っており、「一昨日午後一時帰宅」とあることから、遅くも12月26日には東京に戻っていたことが分かる。このハガキは牛山充宛で、京城での演奏について次のように報告している。用紙は朝鮮総督府鉄道局発行の朝鮮ホテル絵葉書である。

「御無沙汰御免下さい 一昨日午後一時帰京致しました京城の音楽会は二日共意外の盛会で候廿二日には李王両殿下の御前で演奏致しダイヤモンド入の金側時計に李王家御紋を付けて頂きました。出立の朝より熱が少しあり次第に高まりました為下ノ関にて休みましたが今に床について居り咽喉病なれど病名不明の為今日医師〔以下、表の宛名面へ〕が二人参る事に相成候間休み中に全快致す事となりますか 一月は充分休養するつもりにて次の音楽会の事はよろしく御断り下さいませ」⁶

あるいは、この葉書が投函前日（12月27日）に書かれたとするなら、帰京は12月25日の午後となり、帰途半日下関で休養ただけで東京に直接戻ったことになる。

いずれにしても、100年近く前の一人の演奏家の2週間がこのような形でくっきりと浮かび上がってきたのは驚きであった。

3) 演奏会の準備と当日

この演奏会は「組合教會の朝鮮婦人會及び京城基督青年會等の主催」によるもので、「豫ねて日本組合教會が多年貢献しつゝある鮮人伝道の伝道資金を得んがための慈善音樂會」であつた（記事4）。当初は12月18日と20日に朝鮮ホテル、19日と21日に基督教青年會館と計4回の演奏會が企画されたが（記事2）、折悪しく内大臣大山巖公の薨去により12月18日が埋葬式当日となつたため、翌春への延期が検討された（記事7）。だが「切符の大半賣切れとなり居れるのみならず折角湧立つた好人氣を外すは甚だ遺憾なり」として、12月19日と21日の2回のみで実施する運びとなつた（記事7）。「兩夜共小倉女史を中心として京城に於ける外人中知名の音樂家も全部出演」⁷するもので、入場料は「朝鮮ホテルの方白券三圓、青券二圓、青年會の方は白券一圓五十錢、青券一圓、赤券五十錢」（記事4）、小倉の出演料は一晚300円であつた（記事6）。

前評判も高く、「京城の好樂家は申すもおろか、西洋音樂の一度も聴いたことのない人までが今度許りは是非一度聴いて置かねばなるまいと湧くやうな人氣」で、「分けて西洋人の評判と来ては非常なもので、遠（さすが）は音樂の本場だけに演奏曲目を見た許りでその素人離れしたのに吃驚して居る」（記事6）。中でも京城合唱団の指導者スミス宣教師は、シカゴで2年間音樂を専門的に学び、卒業後音樂活動を続けている人物であつたので、談話を求められて、「西洋人は小倉末子女史の人物を知らないでも曲目を見た丈でも餘程の名人でなければ到底あれ程の曲は奏けぬと云つて居る・・・それに小倉さんのはどんな曲でも譜本を見ないで自由自在に奏くと云のであるから全く驚くの外はない、小倉さんのやうな人は日本の音樂家と云ふよりも世界の『寶』として保護しなければなりません」と語っている（記事6）。

樂器の準備にも細心の注意が払われた。「小倉女史が演奏に用ふるピアノの選擇に就ては發起人の方でも餘程苦心をしたやうであるが結局朝鮮ホテルにあるピアノの独逸製（二千五百圓）英國製（三千圓）米國製（二千圓）の三個の

内で何れでも小倉女史の任意なものを使用することに決定してホテルは十五日の午後前記の三臺調律を行つた」と伝えられている（記事9）。

初日の演奏会当日は「開會前三十分早くも三百の椅子の上には山縣政務總監を始めとし其他内外朝野の紳士綺羅を飾れる淑女達で埋められ」、会場は「連合國の國旗で華やかに飾られ一壇高き舞臺には燦たる金屏を後に独逸製のベビピアノを央にして本社より贈りたる紅白のリボン美しき大花環神戸女學院同窓會其他より贈れる花環に目も絢なるばかり」であった。

第二回の演奏会では「小倉女史が最後の弾奏を聴かんとて来集する者七八百名の多きに達する見込」（記事18）で、「去る十九日朝鮮ホテルに開かれた時から評判は一層に高まつたものと見え開會前から階上階下立錫の輿地さへなき大盛況」（記事21）であったという。

小倉の演奏は、一日目は会心の出来で、「今度のやうに氣持よく愉快に弾奏の出来た時はございません、ほんとうに心から全身の力を入れて弾くことが出来ました」と語っている（記事17）。二日目は「一寸氣乗のせぬ風も見えたがそれでも逗に女史の腕の捌はいとも見事」（記事21）と評されている。

4) 歡迎行事、御前演奏と人氣

京城到着の翌17日は東京音楽学校同窓会茶話会、18日は神戸女学院卒業生同窓会、19日はお昼は渡邊高等法院長主催午餐会、夕方に阿部本社長晚餐会、「引き続き二十日より二十二日正午に至る迄淑明高等女學校學鑑淵澤女史、中央青年會のブロックマン、松本辯護士、尹致哭氏等の招待宴會ある筈」（記事13）と歡迎行事が目白押しであった。さらに20日（火）には「無名の一基督教信者よりとして馬車を一日賣切りで寄附したものがあつた女史は其れに乗つて終日市中进行を乗り廻して居た」（記事19）という。小倉が「今日まで御社を始めこんなに皆様の同情を與へられたり御歡迎を受けましたことはございません私の一生を通じて忘るゝことが出来まいと存じます」（記事17）と述べたのも頷ける。

李王家での御前演奏については、12月19日に協議中（記事13）、翌20日に昌徳宮での演奏が決定と報道された（記事15）。当日は「豫定の三曲を奏し終へて、女史が静かに座を退らうとすると、妃殿下から更にとのお望みで、妃殿下の日頃手づから親まれている楽譜を二曲奏し上げた、両殿下には殊の外満足されて記念として、純金製寶石入婦人用懐中時計一箇、同髪飾一具に金百圓を下賜された」（記事24）という。これは上述の絵葉書の記載内容と合致する。

小倉が京城を去った五日後の12月28日、小さな記事が掲載された。それによれば、「此前松井須磨子が来たときに訪ねて行つた若い婦人が四人ある。その婦人達が此間また小倉末子嬢を朝鮮ホテルに訪問した」という。さらに「小倉末子嬢の滞京中に女學生の間に右の手を口にあて、軽く咳をする態（こなし）が流行した。これは何でも女史が女學校を訪問したときにやつた態を真似したものだとやらいふことだが流行心理は妙なものだ」（記事25）と伝えており、当時の小倉の人氣は女優並みだったことが窺われる。

5) 生い立ちと義姉マリアの役割

『京城日報』の記事には、小倉自身ならびに義姉マリアへのインタビューが含まれており、これまで知られていなかった小倉の生い立ちや義姉との関わりが語られていて興味深い。

とりわけ、初回の演奏会当日（12月19日）に掲載された記事（記事12）は、朝鮮ホテルの大食堂で小倉がピアノを練習している間にマリアからじっくり話を聞いて書かれたもので、それまでの様々な経緯が明かされている。ここから、小倉が幼年時を（生地は滋賀県大垣ではなく）東京で過ごしたこと、義姉マリア（記事中では「まり子夫人」とされている）との合性がよかったこと、父の遺言によって小倉の養育がマリアに託されたこと、小倉は体が大変弱かったこと、小さい時から凝り性であったこと、幼稚園で絵が好きで、ピアノの絵を教えてもらったのがきっかけで「ピアノの記號」まで覚えてしまったこと、小学

校入学時には鍵盤の位置を覚えてしまい、楽譜から目を離さずに弾けるようになっていたこと、8歳の時から外国婦人にピアノの指導を受けるようになったことが分かる。

「幼稚園が済んで小学校に入學する時分にはピアノの鍵盤を全部暗記して譜さへ見て居れば手の方は見なくても弾ける位になつて参りました、私し[ママ]は末ちゃんがピアノに對して天才的の技能を持つて居るやうに思はれたので八歳の時に或外國婦人を宅に雇入れて教へることになりました、何んでも其時に末ちゃんが鍵盤の方を見ずして弾きますのでほんとうの年を云はないのだと思つて私にも末ちゃんにも八歳ではなくて十歳なのではありませんかと申した位でございました⁸⁾」(記事12)

小倉をピアノに導いたのも、小倉の才能に最初に気が付いたのも、義姉マリアであったことが分かる。この点については小倉自身、釜山から京城に向かう列車の中で行なわれたインタビューで次のように語っており、義姉マリアに感謝していることが感じられる。

「私が今日のやうになりましたのも全く此處に居ります姉のお蔭でございますハツ位の時分から樂器に觸ることが非常に好でございまして間がな隙がなピアノを弾くと云ふやうになりました十二歳頃には餘りに私がピアノを弾きたがるものでございますから兄や姉が體に障つてはと申しまして私を樂器の置いてある部屋に入れぬやうにと鍵を下したことさへありました、けれども私は一日でも一時間でもピアノの側を離れてはとてもとても淋しくて仕方がありませんので兄や姉の怒るのも聞かずに弾きたがりますので遂に姉も痺を切らして独逸や米國に居ます時分には毎年の夏二三箇月間程位ピアノのない山の上の避暑地に連れて行かれることになつて居ました」(記事10)

小倉はとにかくピアノを弾くのが好きな少女であつたらしい。「ピアノを習ひ始めてから十何年間随分苦しい時がありましたが一曲を覚え込んで自由自在に鍵盤を動かすことが出来るやうになつた時の嬉しさは何とも此喩やうがありません、今日迄覺込んで終ひましたのは三十曲位ございませう」と述べている。さらに「一曲について三四箇月も練習すれば一寸位は弾けることになります、けれども人様の前に出て弾きますまでは半年や一年の練習の要りますやうな難しいのもございます」（記事10）と答えている。

マリアのインタビュー記事（記事12）の話題は、当時25歳の小倉の結婚問題にも及んでいる。「養子を致しますかそれともお嫁に行つて子供でも出来たのを相続人に致しますか今の處は何んとも定めて居りません、本人は一生を独身で音楽に貢献したいとは申して居りますけれども到底そんな可憐そうなことはさせられぬと存じて居ります」。アメリカ滞在時に外国人との結婚を勧められたが、「日本婦人はやはり日本の男子と結婚するのが一番よい方法」というのがマリアの意見である。さらに、「一度夫に嫁しましたならばどこまでも一家の主婦として尽す可き正道を踏んで行かねばなりませんから旅に出るやうなことは断然止めねばなりません」と述べており、マリアが伝統的な結婚観を持っていたことが分かる。独身で演奏活動（演奏旅行を含む）を続けるか、結婚して家庭に入るか、小倉には二者択一の道しかなかったようだ。マリアはここで「衣類などは常に西洋服のみを着けて居ますが此間の御前演奏の時に着て出ましたのも今度私共二人が著て居りますのも大方は末ちゃんの手で縫つたものがございます」と小倉が裁縫にも長けていることを強調している。

このように、義姉マリアはピアニスト小倉末子を育て、支えてきた大きな力であつた。それは記事中でも「小倉さんが赤ちゃんの時代から影の形に添ふやうにして米國や独逸までも遙々と小倉さんの音楽修業のために同行して行つたと云ふ令兄小倉庄太郎氏夫人」（記事10）、あるいは「小倉末子女史を今日の名人とならせたのは令兄小倉庄太郎氏夫人まり子さんと云ふ人があつて末子女史が三つの年から廿五歳の今日迄陰になり陽になつて護り立て、來た」（記事12）

と明記されている。マリア自身「独逸や、米國の音樂學校で教へたり學んだりする間でも常に私は末ちゃんのお父さんに頼まれた責任の上から一日も側を離れたことはなく附いて居ます」(同)と述べており、マリアの献身は小倉の父の遺言を遵守したものだことが分かった。

6) 職業婦人の手本として

以上から、1916年12月の朝鮮への演奏旅行の様子と、幼時からの生育歴の概略が得られた。

小倉の演奏旅行に義姉マリアが付き添っていたことは、1919年の大阪旅行の際にも報道されている。大正8（1919）年7月19日付の大阪朝日新聞に「樂界の明星小倉女史／優に柔しい和服姿で／金髪のお姉えさま〔ママ〕と二人連れ／公會堂の音樂會⁹出演の爲來阪／列車中で独逸音樂を語る」という記事があり、その冒頭にマリアが登場する。

「態々大阪から恐縮しますね」と先づ溢れるやうな愛嬌を浴せかけるのは小倉女史のお姉えさま金髪のマリア夫人である、小倉女史をして樂界の明星たらしめた此の外國婦人は、我がことのやうにして嬉しそうに女史を顧みる」

これは正に、クララ・ヴィークが上述のバリからの書簡で触れていた「どんな集りにでも付き添ってくれたり、訪問者を迎えてくれたりするような年配のご婦人」の役回りである。小倉の最も若い弟子の一人である藤澤克江氏からも、「レッスンにお宅に伺って、『いらっしゃい、よく来たわねえ』と歓迎してくれるのはお姉さんの方で、先生自身はあまり物を言われなかった」と伺った。新聞記者に対しても、レッスンに来る弟子に対しても、まずマリアが出迎えるというパターンが確立していたものと思われる。

なお、この記事には「來阪したピアニスト小倉末子女史（向つて左）と其の

義姉（あね）マリヤ夫人」とキャプションのついた写真が添えられている。

それから4年後の1923年、神戸女学院第5代院長シャルロット B. デフォレスト（1879～1973）はその著『パン種としての日本女性』¹⁰において、小倉の慎重な態度を「職業をもった若い女性にとって貴重な手本」となるものと評した。

当時、社会の規範が揺れ動き、人のあら探しをしようと世間の目が光っていた時代で、小倉さんが悪い評判をたてられないように気を配ったことは、職業をもった若い女性にとって貴重な手本となります。彼女は演奏旅行で、いつもドイツ人の義姉に付添ってもらっていました。その義姉さんに最初、ピアノの手ほどきを受け、そのおかげで彼女は現在の恩恵にあずかることができたのです。（145頁）

演奏旅行に際して年配の女性に付き添ってもらうことは、女性に対する社会規範の束縛とうまく折り合いをつけながら専門的な音楽活動が続けるための知恵であったが、小倉の場合には幼時からの経緯によってむしろ自然発生的に備えられた環境であったと言える。

小倉にとってマリアは、義理の姉妹とはいえ25歳も年が離れており、「天才を孕ぐんだ隠れたる温き力／まり子女史の苦心＝末子女史のお母さん代り」（記事12）とあるように育ての親であり、小倉の才能を早くに見抜いてふさわしい環境を整えてくれた恩人であったとすることができる。小倉がピアニストとして本格的な演奏活動を始めてからは、ステージ・ママないしはコンサート・マネジャーとしての役割も果たしていたことだろう。ベルリン出身のドイツ人であったマリアが、来日前にヨーロッパで一体どのような音楽教育を受け、どの程度の専門的な知識を備えていたのか、今のところ手がかりはないが、何とか知りたいところである。

以上のように、わずか一週間の滞在について25件もの記事が『京城日報』に

出たところを見ると、小倉末子の京城訪問は当時のビッグ・ニュースだったと言える。ピアニスト小倉末子の存在感は想像以上に大きなものだったのかも知れない。一方、小倉自身にとっても、この京城への演奏旅行は、自分の社会的な影響力を知るよい機会となったのではないだろうか。

注

- 1 戸籍上は「小倉末」であるが、演奏会プログラム等ではほとんどの場合「小倉末子」と表記しているため、後者を用いる。
- 2 『西美濃わが街』第252号（平成10年5月号）特集「埋もれていた音楽史の孤高なる星、天才ピアニスト小倉末（すえ）」、18～25頁。
- 3 詳細は津上智実「読売新聞に見るピアニスト小倉末子（1891～1944）」『神戸女学院大学論集』第55巻2号、53～68頁。
- 4 表1）における記事の番号。以下同じ。
- 5 日本近代音楽館蔵。解説にも同館の協力を得たことを記して感謝する。
- 6 鉛筆書きで擦れているところがある。特に後半は絵葉書の印刷文字の上に重ねて書かれているため判読が困難。
- 7 京城合唱団（ケーブル、スミス、ミルス、バンパスカー）の四部合唱、スミス牧師、ヴァンパスカー学士、G. ハーデ嬢、そしてアッペンゼラー嬢の独唱が小倉の独奏と交互にあった。
- 8 『神戸女学院新築記念帖』（1934）によれば、小倉末は「8歳の時からエリザベス・タレー先生の指導を受けた」（88頁）。したがってこの「外国婦人」は、神戸女学院の音楽教師エリザベス・タレー女史（1848～1921、在任1896～1909）であったと考えられる。
- 9 大正8（1919）年7月19日（土）午後7時、中央公会堂において開催された大演奏會。
- 10 Charlotte B. De Forest: *The woman and the leaven in Japan* (Central Committee on the United Study of Foreign Missions, 1923) シャルロット B. デフォレスト『パン種としての日本女性 日本の近代化に活躍した女性たち』（別府恵子、頼広節子訳、春秋社、1984）

附録：『京城日報』（1916年）掲載記事

1) 11月30日（木）第3311号（29日夕刊）2面5～6段

「洋琴の名手小倉女史／来たって京城の音楽界賑ははん」【写真1：[横顔]】

淋しい冬枯れの京城音楽界は茲に日本一の洋琴家小倉すゑ子嬢を迎へることとなつた。女史は十二月十九日入京、廿、廿一日を鐘路の基督教青年會で得意の弾奏を試むる筈、さすがに満都の好樂家を熱狂せしむるであらう。申すまでもなく女史が其の

□天稟の好技を認められたのは既に独逸の王立音楽學校在學中からであつたが一時米國市俄古の音楽學校でも一時間四弗の高価教師として有名であつた。女史が帰朝後の最初の公演を試みたのは

□本年五月下旬上野音楽學校で風薫る緑陰に天成の妙技を試みた時であつた。越つて本月の一七日にも女史は音楽學校に於て榮ある皇后陛下の御前演奏を試みし其の自由なる狂想曲の独奏に陛下の

□御感を忝うしたと伝えられて居る、女史はその時「何か独逸物を・・・」との御詠を畏みシューマン作の「鳥の予言者」を弾奏したのであつた。曲は林間に歌ふ鳥のさえずりと

□やさしき羽搏きを聞くが如き妙曲であつた。日本一の洋琴家小倉すゑ子女史は茲旬日の間に親しく京城の人々に相見えんとする、その朝鮮基督教組合教会の為に天來の

□妙技を試みんとするのは好樂家にとつて空谷跫音の感を与ふるであらう。

2) 12月6日（水）第3317号（5日夕刊）3面2段

「小倉末子女史／京城演奏の日程」

畏くも皇后陛下の御前に洋琴の弾奏を試みたる小倉すゑ子女史 [後略]

3) 12月9日（土）第3320号、3面6段「うわさのうわさ」

十七日の朝入京して朝鮮ホテル其他で演奏する筈になつてゐる小倉末子女史が一部の間には国宝とまで賛美されている洋琴の天才たることは隠れもない事実であるが

▲女史が僅か二十五歳にして此の名誉を勝ち得るに至つた経路にはまた並々ならぬ苦心と女史をしてこれまでに大成せしめた援助者の偉大なる力とが潜んで居る

▲女史は神戸の貿易商小倉家の一人娘で幼い時から今にも死ぬかと思われた程秘弱かつたのであるが嬢に當る独逸婦人が自分で責任を以て立派に育て上げて見せると其家庭教育を一身に引受け

▲傍ら音楽にその趣味を向けさせたのが女史の今日ある始めを為したのでその嬢は女史が独逸へ留学する時も米國で音楽教師をしてゐた時も影の形に添う如く常に伴うて女史を保護したものである [中略]

▲女史が京城に来ると聞いて外人側の期待は非常なもので外人楽団のスミス氏初め一同

打ち揃って女史の演奏を聴くつもりださうな

4) 12月12日(火)(夕刊)第3323号、3面2～3段:

「小倉女史演奏／▽朝鮮人婦人会および京城／基督青年会の主催にて」[本文とプログラム割愛]

5) 12月13日(水)第3324号、3面6段「うわさのうわさ」:

十七日朝入京の天才ピアニスト小倉すえ子嬢は神戸の貿易商の一人娘とあれどそれは何かのお間違いにはおはさずや・・・とのやさしいご注意

女史は岐阜県大垣町の出身にて現に実父も同町馬場に居られ長兄は大垣中学の英語教師、次兄は某船の副船長、令弟は海軍士官にて一家を挙げて秀才そろひに候かしこ

6) 12月15日(金)第3326号(夕刊)2面1～3段:

「若い楽壇の女神／待たるる其日 小倉女史の妙手／＝京城外人楽団のスミス氏は斯ぞ語りつ」

楽壇の明星よ!世界の音楽界の秘蔵児よ!と謳はれた小倉末子女史は愈々来る十七日の朝京城に著いて十九二十一日の両日其妙技を聴かさうとして居る此度の音楽會の趣旨が鮮人感化の伝道事業資金を得んためであるのと、出演の樂手が稀代のピアニスト小倉末子女史であるとは京城の好樂家は申すもおろか、西洋音樂の一度も聴いたことのない人までが今度許りは是非一度聴いて置かねばなるまいと湧くやうな人氣、其上昨今の市況の好景氣の影響も手助つて三圓から二圓と云ふ白券や青券の切符を惜氣もなく買込むものが多い分けて西洋人の評判と来ては非常なもので、這は音樂の本場だけに演奏曲目を見た許りでその素人離れしたのに吃驚して居る

◆世界の「宝」です。京城には合唱団と云つて外國人間の音樂の好きな人達が組織した會がある其處の牛耳を取つて居るスミス宣教師は曾て市俄古の或大學で文科を専攻する傍ら二箇年間音樂を學んだ人で卒業後同地でも一流の音樂團に加はつて外國人間にも相當名を知られた人・・・其人の話しによると西洋人は小倉末子女史の人物を知らないでも曲目を見た丈でも餘程の名人でなければ到底あれ程の曲は奏けぬと云つて居る實際朝鮮に来て居る西洋人の内で今度小倉女史が奏く曲目の一でも稽古をせずに奏ける人は一人もありますまい、若し練習をしても却々の大仕事であらうそれに小倉さんののはどんな曲でも譜本を見ないで自由自在に奏くと云のであるから全く驚くの外はない、小倉さんのやうな人は日本の音樂家と云ふよりも世界の『寶』として保護しなければなりません[後略]

7) 12月15日(金)第3326号(夕刊)3面2～3段:

「小倉女史演奏會日取／十八日を十九日に變更」[本文割愛]

8) 12月16日(土)第3327号(夕刊)3面3段:

「小倉女史著期」[本文割愛]

9) 12月16日(土) 第3327号、3面3～5段【写真2：十六日朝入京すべき小倉末子女史】

「小倉女史へ／花環を／▽婦人團の歓迎」[本文割愛]

10) 12月17日(日) 第3328号(夕刊) 2面1～4段【写真3：ピアニスト来る、南大門駅にて】

「軽く疲れた身體を／一等寝臺車の柔らかい絨(クッション)に凭せて／ピアノから離れると淋しくて淋しくて／と、小倉女史、黒目勝ちの／涼しい眼をパチパチさせて語る」女流音楽家の第一人、ピアニスト小倉末子女史が十六日朝南大門著の汽車で入京すると云ふので途中まで出迎へる

◆水原邊で ボーイに聞いて見るとまだ寝臺車にとのことに適當の時機を見計つて刺を通じて見るとどうぞ此方へとの案内につれられて通されたのが一等寝臺車の十二號室「大變御厄介をかけまして有難うございます」と先優しい御挨拶。小倉さんが赤ちゃんの時代から影の形に添ふやうにして米國や独逸までも遙々と小倉さんの

◆音楽修業 のために同行して行つたと云ふ令兄小倉庄太郎氏夫人も側に居て末ちゃん末ちゃんと二十五歳の女史を子供のやうに可愛がる「米國から歸りましたのは今年の四月で夫から音楽學校の方へ出ることにになりました今度京城の知合の方からお招きを受けて参ることを御引受は申したものの、折悪しく身害めて居ましたのでどうかとも心配して居ましたがお蔭で大したこともございませぬ連絡船が荒れましたので

◆姉も私も 少し疲れが出ましたけれど此朝鮮のすがすがしい空氣を吸うと不思議に快復したやうでございませう」と素顔ながら雪のやうに美しい末子さんは黒目がちの涼しさうな眼をパチパチさせる、「私が今日のやうになりましたのも全く此處に居ります姉のお蔭でございませう[中略、引用済み]」と今迄は石膏細工のやうであつた若き音楽家の顔には櫻色の血が溢れて来て何んとも云へぬ緊張した氣分が見へる

▽御前演奏の名曲

「[中略、本文中で引用済み] 何分手先の使ひやう一つで

▽巧拙が 岐れるのでございますから手首や指先の運動には充分の注意が必要なのでございます」と小倉さんは白魚のやうな左右の手を出して觸はらして見せる成程外見は一寸女の

▽優しき 手とばかり見えても筋肉は男にも勝る發達をして居て掌も指の叉もなかなか固い、「今度演奏致しますプレリュード及フューグ(バッハ、リツツト作)を除きましては何れも

▽素人の 方でもよくお解りなる曲のみで殊に先達御前演奏を致しましたキャープリース(サンサン作)バラード(ショパン作)などは最も一般の方の

▽喜ばれ ます曲です[ママ]プレリュード(デブユシー作)のやうな新作物も面白か

らうと存じます」好きな音楽のためには命も惜まぬ小倉嬢は
▽十五年の長き間ピアノを戀人として満腔の愛を捧げて来た、そして其甲斐あつて今日
のやうな誉ある名を為すやうになつた行先々も一生音楽の
▽神に献 げたいと云つて居る若きピアニストの上に幸よ裕なれ

11) 12月18日(月)第3329号、3面1～5段【写真4：ピアノを前に＝朝鮮ホテルにて
小倉末子女史と令姉まり子夫人＝】

「畏しこさ、御裳にのみ／眼止めて 夢見る心地に奏でし名曲／小倉女史、感激して、
御前演奏の光栄を語る／あはれ、サレースの『キャプリース』」[本文割愛]

12) 12月19日(火)第3330号、3面2～6段：

「天才を争ぐんだ隠れたる温き力／まり子女史の苦心＝末子女史のお母さん代り／今日
朝鮮ホテルで晴の演奏」

一藝一流の達人と云はれ名人と讃へられる人となるまでには其人自身の奮励と努力は勿
論必要であるが更に委細に其為人(そのひととなり)を調べて見ると其裏面には隠れた
る力があるものである。十九日の午後七時から朝鮮ホテルの大食堂で

◆名曲を奏で ようと云ふ小倉末子女史を今日の名人とならせたのは令兄小倉庄太郎氏
夫人まり子さんと云ふ人があつて末子女史が三つの年から廿五歳の今日迄陰になり陽に
なつて護り立て、来た其「力」である末子さんは小さい時には東京に居たので今の義姉
のまり子夫人とは

◆殆んど隣合 せであつたが三ツ位の時から大變まり子夫人が好で暇さえあればお母さ
んの處よりもまり子さんの家へ行くと云ふ風であつた、處が末子さんが五ツになつた年
の秋も央散り逝く桐の一葉と共に父君は此世を去つた

◆臨終の間際 にまり子夫人を招いて「末子の将来を何分宣敷御願申す」と云て永久の
眠りに就いたそれから間もなくまり子夫人の手に引き取られて幼稚園に通ふやうになつ
たのである。まり子夫人の話によれば「末ちゃんを私の手で世話することになりました
時分は私達の一家が」

◆神戸に移る こととなつて居ました、生まれてから大變體が弱いので試みに医者に見
て貰ひますと此子供は永くて十二三年早ければ七ツか八ツで死ぬと云はれるのです、初
めは大變失望もしましたが出来るだけやつて見るつもりで食物から温度の具合又は

◆運動の時間 などにも非常の注意を拂ひました、併し天性つき物事に凝性な兒で五ツ
の時に幼稚園に入れますと遊戲の傍大變に絵が好きなので私は其れを利用してピアノの
繪を教へてやりますと非常に嬉しがつて簡単なピアノの記號迄覚えて終つたのでござい
ます[中略、本文中で引用済み]それから神戸女學院の高等科の音楽部を卒業して独逸
や、米國の音楽學校で教へたり學んだりする間でも常に私は

◆末ちゃんの お父さんに頼まれた責任の上から一日も側を離れたことはなく附いて居

ますが御覧の通り體が弱うございますので衛生と云ふ點については人一倍の心配を致します末ちゃんは其後十六の年にお母さんが亡くなられて今では全くの孤児となりました、兎にも角にも皆様の御同情で今日のやうな

◆名誉を擔ふ ことが出来るやうになり一人前の音樂家となりました姿を只一日なりとも両親に見せましたならどれだけ喜んで呉れるであらうかとそれが出来ぬのを大變残念に存じます今では末ちゃんは小倉家を相続しなければならぬこと、なつて居ます

◆養子を致し ますか〔中略、本文中で引用済み〕米國に居りました時も

◆或る米國人 が末さんは外國人にお嫁入りなさつたらよろしいでしょうと云はれましたけれども日本婦人はやはり日本の男子と結婚するのが一番よい方法と存じます、音樂家のやうな一種の藝術家が結婚してからの

◆技術は退歩 しはすまいかと云はれる人もありますがそんなことはなからうと存じます、けれども一度夫に嫁しましたならばどこまでも一家の主婦として尽す可き正道を踏んで行かねばなりませんから旅に出るやうなことは断然止めねばなりません、私しと小倉（庄太郎氏）との間には子供がありませんので今までは

◆自分の子供 のやうにして可愛がつて居ます、末ちゃんは独逸語と英語文は読書、會話共自由に出来ますが、尚ほ仏蘭西語も只今練習中でございます、衣類などは常に西洋服のみを着けて居ますが此間の

◆御前演奏の 時に着て出ましたのも今度私共二人が著て居りますのも大方は末ちゃんの手で縫つたものでございます」と語り終れば折柄大食堂でピアノの練習中であつた末子女史の妙なる音律は一音高く又低く女史自らの生立を物語るかのやう・・・

13) 2月19日（火）第3330号、3面5～6段：

「小倉女史の招待會」〔本文割愛〕

14) 12月19日（火）第3330号、3面6段：

「小倉女史音樂會は今晚／八時より朝鮮ホテルで」〔本文割愛〕

15) 12月20日（水）第3331号（夕刊）2面3段：

「小倉末子女史、昌徳宮で演奏」〔本文割愛〕

16) 12月20日（水）第3331号（夕刊）2面5～6段【写真6：營の花輪＝小倉末子女史へ本社より】

17) 12月20日（水）第3331号、3面1～5段【写真5：彈奏、終りて＝朝鮮ホテルにて、午後十時＝】

「あはれ、ショーパンの夢幻即興曲／弾くも、聴くも、夢心地に／昨夜、朝鮮ホテルの小倉女史音樂會」

独米兩國に遊んで洋琴に對つては我樂壇の誇と稱へらるゝ東京音樂學校講師小倉末子女史の音樂會は十九日の午後八時より朝鮮ホテルの大食堂に開かれた此催が慈善的である

のと

◆出演の人々 有名なピアニスト小倉女史に加ふるに京城外人團の一粒選の大家であることは頗る世間の同情を喚んだと見えて開會前三十分早くも三百の椅子の上には山縣政務總監を始めとし其他内外朝野の紳士綺羅を飾れる淑女達で埋められた會場は連合國の國旗で華やかに飾られ一壇高き舞臺には

◆燦たる金屏 を後に独逸製のベビピアノを央にして本社より贈りたる紅白のリボン美しき大花環神戸女學院同窓會其他より贈れる花環に目も絢なるばかりやがて正八時丹羽基督教青年會總務の開會の挨拶あり直ちに第一部のケーブル。スミス。ミルス。パンパスカーの四氏四部合唱グノーの「自由の名」に移り喝采の後、代つて、小倉女史が

◆嫺やかな姿 を壇上に運んで花やかな微笑を聴衆に投げた後、バッハ、リッツのブレリユード及びフュグ（イ短調）を奏で出すと聴衆はその鍵盤の上を閃き走る白魚の如き指端より迸り出づる妙なる調べを夢見る心地に聴き入る次いでスミス氏の独唱「巡礼」「牢番」小倉嬢の独弾「バラード」（ショーパン作）ヴァンパスカー學士の独唱「五月の朝」小倉嬢の独弾「キャプリース」ハーデー嬢の独唱「子守唄」小倉嬢の独弾リッツ作「泉のほとり」と曲目は無事に次から次へと進んで

◆曲目終る毎 に喝采鳴も止まず出演者は皆そのため再び登壇しては演奏したが小倉女史はその最も得意とするショーパンの「ファンタジイ、アンプロンプテス」「ベルセーエース」「エチュード、エ、フロット、オパース二十五」を人々の喝采に酬ゆるために追加して彈奏した。斯くて非常の成功の裡に十時二十分散會した。小春風ぎの暖かい朝鮮の冬の夜に、夢見るショーパンのロマンチックの旋律を聴く機会があらうとは今迄思ひ設けなかつた聴衆は次の如き感想を述べてゐる。

◇「日本も進歩しまし／た、怖しいやうな／気がします／ゲール博士夫人談」

日本に来て三十年近くも居りますが未だこんなに上手なピアニストを聞いたことがありません、只今もお隣の婦人方と小倉嬢のお噂を申して居ました處なのでございますが實に日本も音楽が進歩致しましたものですね京城などでこんな音楽が聴かれやうとは夢にも思ひませんでした小倉嬢のピアノを窺つてから私などはお恥しいので弾れぬやうに思ひます未だお年もお若いと云ふことでございますから此先どれだけ進歩致しますか恐ろしいやうでございます

◇「驚く可き／筋肉の力／世界的の音楽家／スミス氏の談」

小倉さんに遭はない前からお話して置きました通り全く天才ですね小倉さんの弾く曲目だけを見て私は非常に驚いて居ましたが今其演奏を聞いて二度吃驚致しました、私許りじゃないんです、ここに来て居る外國の人が

▽皆驚いて 居ます、小倉さんの手を御覧になりましたでしょうが恰度私の手のやうに、と此時スミス氏は十能のやうな右の手を出して見せながら、太いではありませんか、あ

れは全く筋肉の発達したものです、アレでなければほんとうのピアノを弾くことは出来ません、小倉さんが今晚あんなに賞賛されるのもあの筋肉の力です、私は聲樂の方ですからピアノの方のことに就いては餘り廣い知識を持つて居ませんけれども、ミス、アップテンツエラーの申しますには十年來此方聴いたことのない

▽名曲を聴いたと喜んで居られました、殊に御前演奏にお弾きになった、サンサンのブリースは非常に變化の多い曲なのですが其微妙な所を極めて巧みに奏したのは實際世界的音樂家と申さねばなりません [中略]

▼「ほんとに／愉快的気分／と小倉女史」

最後の一曲を奏で舞台を降りた末子女史は薄化粧にほんのりと櫻色を見せながら四方八方から起る拍手を受けつゝ、語る「米國から歸りまして音樂會にも度々出ますけれども今度のやうに氣持よく愉快に彈奏の出来た時はございません、ほんとうに心から全身の力を入れて弾くことが出来ました、會場の具合と云ひ裝飾やら舞臺の高さなど一として私を喜ばせぬものはありません私の今後は未だ明りませんが今日まで御社を始めこんなに皆様の同情を與へられたり御歓迎を受けましたことはございません私の一生を通じて忘るゝことが出来まいと存じます、舞臺に出る前はどうかと種々心配もし疲れも致しましたけれど只今となつては非常に氣分が晴々と致します、曲目の外に三曲弾きましたが御蔭様で皆無事に終ることが出来ました」と語れば側から姉君まり子夫人がまた莞爾やかに笑みつゝ、・・・

18) 12月21日 (木) 第3332号、3面6段：

「小倉女史最後の彈奏」

十九日朝鮮ホテルにて開會せる慈善音樂會は更は今二十一日午後七時より鍾路中央基督教青年會々館に於て開會ピアニスト小倉女史を始め外人合唱團の出演ある筈なるが當夜は小倉女史が最後の彈奏を聴かんとて來集する者七八百名の多きに達する見込なれば來會者は成る可く早く入場する方混雜せざるべしと

19) 12月21日 (木) 第3332号、3面6段「うわさのうわさ」：

▲朝鮮ホテルに滞在中の小倉末子女史に二十日の朝、無名の一基督教信者よりとして馬車を一日賣切りで寄附したものがある女史は其れに乗つて終日市中を乗り廻して居た

20) 12月22日 (金) 第3333号、3面4段：

「□あの姿を／▽貴方は何う考へますか／▽いい調和ではありませんか」[本文割愛]

21) 12月22日 (金) 第3333号、3面5～6段：

「二日目の彈奏／小倉女史の音樂會」

慈善音樂會の第二日は二十一日の午後七時半から鍾路の青年會館で催された去る十九日朝鮮ホテルに開かれた時から評判は一層に高まつたものと見え開會前から階上階下立錫の輿地さへなき大盛況出演者の都合で曲目に多少の變更をして最初に小倉女史のピアノ

独弾となり女史は夜會服を着て舞臺に現はれリッツのプレリュード及びフユグを弾く舞臺の設備やら場内一體の空氣やらが前回の時のやうになかつたためか一寸氣乗のせぬ風も見えたがそれでも逗に女史の腕の捌はいとも見事に一曲を終り續てスミス氏及アルベンゼン嬢の独唱があつて更に小倉女史の独弾二曲此間十分間休憩の後ちハーデーさんの独唱、京城合唱團の四部合唱、小倉女史も亦三曲を奏し歓声裡に十時半散會した

22) 12月23日（土）第3334号、3面6段：

◆「小倉嬢の出發」[本文割愛]

23) 12月24日（日）第3335号（夕刊）1面8段「人事消息」：

小倉末子嬢（ピアニスト）二十三日朝退京

24) 12月24日（日）第3335号（夕刊）2面3段：

◆「昌徳宮／御前演奏／小倉女史を召す」[本文割愛]

25) 12月28日（木）第3339号（夕刊）2面7段「灯ともごろ」：[本文割愛]

Summary

A Feminine Pianist on Tour: OGURA Suyeko on her Concert Trip to Keijo (Seoul), Korea in 1916

TSUGAMI Motomi

This report is on the concert tour to Keijo (Seoul), Korea, in 1916 of the Japanese pianist OGURA Suyeko (1891–1944), one of the then leading Japanese pianists and of the earliest alumnae of the Music School of Kobe College. It also assesses the role of her German sister-in-law Maria OGURA, who took over her mother's place from her childhood and functioned as a guardian and manager to her total activity, escorting her on every trip and receiving guests and journalists.

Concert tours became indispensable to female, as well as male, musicians from the 1820's in Europe. Although the development of railways from 1830's made them more practicable, there remained special difficulties for traveling women musicians, first, heaviness of the piano and the harp, the instruments allotted to women, and the 'common sense', according to which women should be escorted by men or at least by elder females.

Her visit to Keijo was reported in twenty-five articles in the *Keijo Nippo*, a daily newspaper written in Japanese, from November 30th to December 28th, with six photos in total. These articles tell us that she stayed there for a week from December 16th to 23rd, giving two charity concerts on 19th and 21st and a performance in the Court of the Ri Dynasty on 22nd. The two public concerts were well received and successful with large audiences of about three hundred and seven hundred each, including European people and musicians. It was also unforgettable to Suyeko herself.

In addition, the interviews with Suyeko, Maria, and with Mr. Smith, a missionary and a professional singer from Chicago, give us vivid images of her life and career: her father's death when she was five years old; how she became interested in piano when she was a kindergartner; her study in Japan, Berlin and the United States; Maria's worry about Suyeko's marriage in future.